

福岡行忍嶽

略縁起

それ行忍嶽は昔し 人皇四〇代天武天皇の白鳳年の事なるに 役の行者小角入唐を企て玉い 九州に渡り豊後の浦邊に文殊の道場を見立て 夫れより久住山阿蘇山 日向高千穂の邊りを遶りて天草に渡り 悉く路を踏み分け 老嶽 帽子 蘇迷廬を順行して行忍に至りぬ 其の時実相とて 仙術を修して師の無きを恨むる折りなれば 行者に逢い奉りて門人と為り 夫れ迄は今の鶴の山中に安居せしが 行人に移り種々に仙術を修し飛行自在作りぬ 或る時は温泉に遊び 又阿蘇に行き 或いは霧島に渡り 郡中を守護するに 天正の亂に菊池の浪人に金兵衛 喜右衛門とて二人ありて遠がの豪

雄にて四郎の類に非ず かかる故に此の谷中には 四郎の餘黨一人も入れずと 幾許堅固なれども 或る時火箭を放つて丁間を違い 行忍へ打ち付け 惜哉千年に及ぶ仙術の行者之が為に死す 弟子あり自忍という修行足らずして飛んで即ち落ちたり その處を俗に中飛轉倒と言うなり 格別の崇き修行者達なればとて 石像觀世音を安置し諸願空しからずや 嗚呼時哉かかる仙術の人を失うことを 依つて 觀音を信仰する輩は 五體の痛み 手足の痛むに祈願するには 立地に 平癒する事はこれ行者の誓いなり 信心 宜しく肝に銘ずべし

平成五年三月吉日

福岡壮年会

